

学校教育における性的指向・性同一性に配慮した HIV 予防教育に関する研究

研究分担者：佐々木 肇子（立教女学院短期大学現代コミュニケーション学科）
研究協力者：河合 隆次（奈良県高等学校人権研究会事務局長）
星野 慎二（NPO 法人 SHIP 代表）
研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部）

研究要旨

非 MSM による HIV 感染者数が 1992 年にピークを迎え、以降は横這いとなっているにもかかわらず、MSM においては着実に増加しており、2008 年以降は感染者数のうち 7 割以上が MSM によるものと報告されている。この現状を考えると、MSM をテーマとした教育こそが感染拡大予防に期待されるといえる。一方、これまでのわが国の学校における HIV 予防教育では、MSM に特化させずに実施されてきた。そこで本研究では、男女間の性感染症予防教育で重視されてきた「自己と他者の尊重」をセクシュアルマイノリティにまで広げ、これを学校教育において取り扱うことにより HIV 感染拡大を防ぐという仮説に基づき、学校における HIV 予防教育を行い、その教育効果を評価することを目的とした。本年度はそれに先立ち、授業実施の際に使用する共通の授業案を作成することが目的である。

1. 高等学校教師における授業で多様なセクシュアリティを取り扱うことへの抵抗感

64.1%の教師に、授業内で教えることへの抵抗が見られることが明らかとなった。その理由としては、①教師自身の知識不足と偏見への自覚（教職員の同意も含む）、②授業をすることで当事者を傷つけてしまうのではないかという不安（保護者からのクレームも含む）、③周りの子どもたちを刺激し収拾がつかなくなるのではないかという不安、という 3 点に集約された。

2. 授業案作成のための検討会

- 1) 上記①～③への不安が低減されるような授業案を作成するため、各回 2～51 名の公立学校教師と全 7 回、討議を繰り返した。
- 2) 現段階で、2 回の授業案が作成され、1 回目が多様なセクシュアリティの自己理解と他者理解を、2 回目が多様なセクシュアリティの尊重と肯定を学び、その否定が HIV 感染などの不健康行動と結びつく、ということ学ぶカリキュラムとした。
- 3) 現場の教師による助言により、10 項目以上の改変が可能になった。

A. 研究目的

児童・生徒に対するわが国のこれまでの HIV 予防教育

厚生労働科学研究平成 21 年度報告書「国内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析に関する研究」（主任研究者：木原正博）によると、非 MSM（Men who have Sex with Men は以下 MSM と略す）による HIV 感染者数が、1992 年にピークを迎えて、以降は横這いとなっているにもかかわらず、MSM においては着実に増加しており、2008 年以降は感染者数のうち 7 割以上が MSM によるものと報告されている。このことは、MSM に特化した HIV 予防が急務であることを示しているといえよう。

一方、日本の HIV 予防教育、特に児童・生徒を対象とした学校における予防教育についてを

振り返ると、MSM に特化した教育よりも、男女間における性交渉や薬害、母子間など、さまざまな経路によって HIV は感染するということを念頭に置いた教育が、主に実施されてきたといえる。90 年代は特に、MSM と非 MSM とで感染者の割合が対照的でなかった時期でもあり、MSM に特化する必然性もなかったともいえる。たとえば、財団法人日本学校保健会による文部科学省中学生・高校生用エイズ教育パンフレットおよび手引きは、2003 年に作成されているが、20 代・30 代の感染が多いということと男性に増えているということを掲載してはいるが、それが MSM であるとは言及していない。なお、上記木原の調査では、MSM の感染者数の割合が非 MSM の割合を上回るのは 2002 年からである。

したがって、2014 年の現状を踏まえた HIV 予

防を考えれば、MSM をターゲットとした教育こそが感染拡大予防の効果を高めると考えられるだろう。

さて、平成 20 年 1 月 17 日の文部科学省における中央教育審議会答申では、「子どもたちが性に関して適切に理解し、行動することができるようにすることが課題」として、その課題の中に「若年層のエイズ及び性感染症や人工妊娠中絶」が挙げられ、これらに対し、「学校全体で共通理解を図りつつ、体育科、保健体育科などの関連する教科、特別活動等において、発達の段階を踏まえ、心身の発育・発達と健康、性感染症等の予防などに関する知識を確実に身に付けること、生命の尊重や自己及び他者の個性を尊重するとともに、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連付けて指導することが重要」だと述べられている。

この理念は、MSM に特化した HIV 予防教育においても通底していると考えられる。すなわち、拡大が広がっている MSM による HIV 感染数の背景には、こうした「健康に対する知識」のみならず、「自己と他者の尊重や相手を思いやりながら構築していく望ましい人間関係」というものが欠如しているのではないか、ということが推察されるのである。

そこで本研究では、MSM の背景に着目し、MSM という人間関係が「思いやりをもち、自己と他者を尊重する形で構築されるようになる」ことによって、HIV 感染の拡大を防ぐという仮説に基づき、学校における HIV 予防教育を行い、その教育効果を評価することを目的とする。

セクシュアルマイノリティに直接的、間接的に否定的な学校風土と HIV 感染リスクを含めた不健康行動との関連

MSM の当事者、及び予備群となる、セクシュアルマイノリティの児童・生徒が置かれている学校における立場はいかなるものなのかについては、欧米において数多くの研究がなされてきた。そのいずれもが、いかに「思いやりをもち、自己と他者を尊重する形で人間関係が構築されるようになる」ことを阻む学校環境なのかを、如実に物語るものである。

セクシュアルマイノリティの児童生徒は、悪口、中傷、いじめ、嫌がらせや、その他異性愛規範の学校風土ゆえに、学校を危険なところであると感じている (D'Augelli, Pilkington, & Hershberger, 2002)。特に、当事者が学校でいじめ被害を受け

やすいことはいくつもの研究で実証されてきた (Blackburn, 2007; D'Augelli, et al., 2002; Toomy, McGuire, Russell, 2012; Sandfort, Bos, Collier, & Metselaar, 2010; Williams, Connolly, Pepler, & Craig, 2005)。

このようなセクシュアルマイノリティであることを理由としたいじめ経験のその後の結果を追跡すると、男子生徒では不安・うつを引き起こし学校への所属感を低め、女子生徒では引きこもりへと導く (Poteat, & Espelage, 2007)。いじめ経験は、学校時代だけで終わるものではなく、いじめ被害を受けたセクシュアルマイノリティのうち 17%がその後、成人になってから PTSD 症状を呈しているという (Rivers, 2004)。こうしたことを踏まえ、最近の研究では、セクシュアルマイノリティの児童・生徒の性的リスク行動、物質乱用やその他のメンタルヘルスの問題に焦点が当てられ (Espelage, Aragon, & Birkett, 2008)、セクシュアルマイノリティに否定的な態度や行動、あるいは健康的な発達を促進する保護因子などを支える文脈や特徴に関心が移ってきている (Russell, Kosciw, Horn, & Saewyc, 2010)。

直接的ないじめ被害だけではなく、セクシュアルマイノリティに対する否定的な学校風土もまた、甚大な影響を及ぼしている。たとえば、否定的な学校風土は、当事者の自殺念慮や自殺企図 (Hatzenbuehler, Birkett, Van Wagenen, & Meyer, 2014; Plöderl, Faistauer, & Fartacek, 2010)、うつ・薬物使用・不登校 (Birkett, Espelage, & Koenig, 2009) との関連が指摘されている。

そして、学校において、セクシュアルマイノリティに対する尊重がなく、虐げられてきた当事者は、そうではない当事者よりも、自殺企図やうつなどの精神的健康の悪化のみならず、2 倍の STD の診断と HIV 感染のリスクを被っているのである (Russell, S. T., Ryan, C., Toomey, R. B., Diaz, R. M., & Sanchez, J., 2011)。

すなわち、直接のいじめ被害も、間接的なセクシュアルマイノリティへの否定的な学校風土も、いずれもセクシュアルマイノリティの当事者を不健康へと関連付けるものであり、学校におけるセクシュアルマイノリティに対する風土や生徒や教師の態度というのは、まさにセクシュアルマイノリティの児童・生徒の健康な発達を左右する重要な要因であるといえる。

教育においてセクシュアルマイノリティが扱われない学校風土

セクシュアルマイノリティに対する直接的、間接的に否定的な学校風土は、上記のように、さまざまな問題行動へと結びつくが、それだけではなく、セクシュアルマイノリティの児童・生徒が“学校制度上いないものとされている”(Macgillivray, 2000) ときにもまた、問題が生じる。たとえば、校内でセクシュアルマイノリティについての肯定的ではない言動があった時に大人の介入がないと、当事者がそこにいるのか、いないのかに関わらず、それは受身的に同意をしたことになる。これは、教師が否定的学校環境を持続させるのに加担する、ごくありふれた形である (Adelman & Woods, 2006; Macgillivray, 2000; van Wormer & McKinney, 2003)。

米国では、都会よりも田舎が、コミュニティにいる大人たちが教育を受けているよりも、受けていないほうが、セクシュアルマイノリティに対する否定的な学校風土を蔓延させている (Kosciw, Greytak, & Diaz, 2009) という。このように地域や大人の教育レベルに左右されて不利益を被ることのないよう、公教育においては、すべての子どもたちが多様な性に対する肯定的な学校風土の中で教育を受けることができ、学校を安心安全な場所であることを保証する必要がある。

セクシュアルマイノリティの当事者が安心安全に過ごせる学校環境介入 (Safe school interventions) に関する研究

セクシュアルマイノリティの人間関係が肯定的に育まれるようにする特定の介入については、欧米では実施されてきている。その内容としては、セクシュアルマイノリティの子どもを守るための学校ポリシーを策定すること、GSA (Gay/Straight Alliances : 生徒主体のセクシュアルマイノリティ・クラブ) を始めること、セクシュアルマイノリティの生徒の心理サポートを提供すること、セクシュアルマイノリティのテーマについての教職員研修をすること、そしてセクシュアルマイノリティのテーマをカリキュラムに組み込むことなど (Hansen, 2007) である。

このような学校の保護的な要因は、それ単独でセクシュアルマイノリティの生徒を安心はさせない。つまり、学校環境が保護的であるというだけでなく、実際に「大人とのつながりを感じられる」という要因が媒介されないと、当事者の生徒の安心感へとつながらない (McGuire, Anderson, Toomey, & Russell, 2010) という。

セクシュアルマイノリティに関する教員研修

を受けると、知識とセクシュアルマイノリティの児童・生徒に対する肯定的な態度が増し、学校風土が改善する (Kose, 2009; Szalacha, 2004) というが、もっとも効果が高いと言われているのが、セクシュアルマイノリティのテーマをカリキュラムに組み込むことである。

たとえば、2003～2005年にカリフォルニアの中学生・高校生を対象とした調査を基に 28校 1415名を再分析したデータ (Toomey, McGuire, Russell, 2012) からは、授業でセクシュアルマイノリティについて学んだのは 58%であり、カリキュラムの有無と生徒が認知する校内のセクシュアルマイノリティに対する安全性、さらにはいじめや嫌がらせの被害とには相関がみられた。学校で公式にセクシュアルマイノリティのインクルージョン教育を行うことは、学校の安全性に対する最も強い予測因子だという。

そのほか、LGBTQ (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Questioning) プログラム後にランダムサンプリングで選ばれた生徒に回答させた学校風土調査でも、教師が同性愛嫌悪的言語を止めるよう、より介入しており、教室でセクシュアルマイノリティについて穏やかに安心して扱うようになっているようにみえるという評価を生徒たちは下している (Horowitz, & Hansen, 2008)。

このように、Safe school interventions を行った学校風土のレビュー論文では、そのすべてで学校風土の肯定的な改善がみられたと報告されている (Black, Fedewa, & Gonzalez, 2012)。

本研究が目指す、学校教育での性的指向・性同一性に配慮した HIV 予防教育

以上、わが国の HIV 予防教育と、HIV 感染リスクの高いセクシュアルマイノリティの学校環境状況を振り返った。これを踏まえ、本研究の目指す HIV 予防教育について述べる。

本研究では、学校教育における「セクシュアルマイノリティへの否定化及び非可視性」に基づく、非尊重の風土や態度を問題視し、このような状況が当事者の自尊心を低下させ、引いては、精神的健康の著しい悪化、そして、HIV 感染のリスクに繋がる性行動を導くという、先行研究の流れを汲む。そして、セクシュアルマイノリティも含めたあらゆる人間関係が「思いやりをもち、自己と他者を尊重する形で構築されるようになる」ことを教育目的とした授業案を作成する。この教育目標が達成されれば、HIV 感染拡大の予防に寄与すると考えられる。本研究が作成する授業案のもつ背

景の流れについては、図 1 に示した。

このように、授業案において、生徒が到達すべき目標としては、「性の多様性の尊重」であり、それに基づく、自己尊重と他者尊重ということになる。

児童・生徒の段階である思春期・青年期においては、自分自身の性のあり方について、性行動の対象の性別がテーマとなる性的指向についてマイノリティであるのか、自分自身がどのような性別として生きていくのかがテーマとなる性同一性についてマイノリティであるのか、あるいは両方であるのか、あるいは、セクシュアルマイノリティとは言えない状態なのか、そのアイデンティティが確立しにくい時期といえる。したがって、学校教育でテーマとするセクシュアリティのあり方も、あらゆるセクシュアルマイノリティについて取り扱う必要があるといえる。

そして、MSM 当事者、あるいは予備群と思われる児童・生徒に届き、自尊感情が育つよう働きかけることはもちろんではあるが、さらに MSM 非当事者である児童・生徒が、他者尊重を学び育む機会となる必要性も大きいと考えられる。なぜならば、セクシュアルマジョリティによるセクシュアルマイノリティに対する無理解や偏見などが横行しているのは、学校教育でこのテーマが取り組まれていなかったがゆえに、他者尊重の学び

の機会が欠如しており、そのために、セクシュアルマイノリティをターゲットとして、いじめや嫌がらせなどの加害行為を行ってきたと考えられるからである。セクシュアルマイノリティ当事者は、そのセクシュアルマジョリティの無理解や偏見などを内在化させ、自らの自尊心を持てなくなったり、あるいは加害行為に加担したりすることもある。したがって、セクシュアルマジョリティが性の多様性についての教育を受ける機会を与えられることこそが、学校風土をセクシュアルマイノリティに肯定的にするための原動力となる。当事者、非当事者にかかわらず、セクシュアルマイノリティに対する肯定的な学校風土をつくる一員となることによって、MSM 当事者が自尊心を持てるようになると思われる。

先に、思春期・青年期においては、自らのセクシュアリティが確立している子どもばかりではないと述べた。このことについては、セクシュアルマジョリティという自覚のある児童・生徒においても、同様である。アイデンティティの探求段階にある思春期・青年期においては、自らのセクシュアリティについて、考えるだけの情報や場が与えられることも必要である。そして、そのような時間の中で、自分のセクシュアリティが尊重されること、他者のセクシュアリティを尊重することを学んでいくことが、引いては HIV 感染など

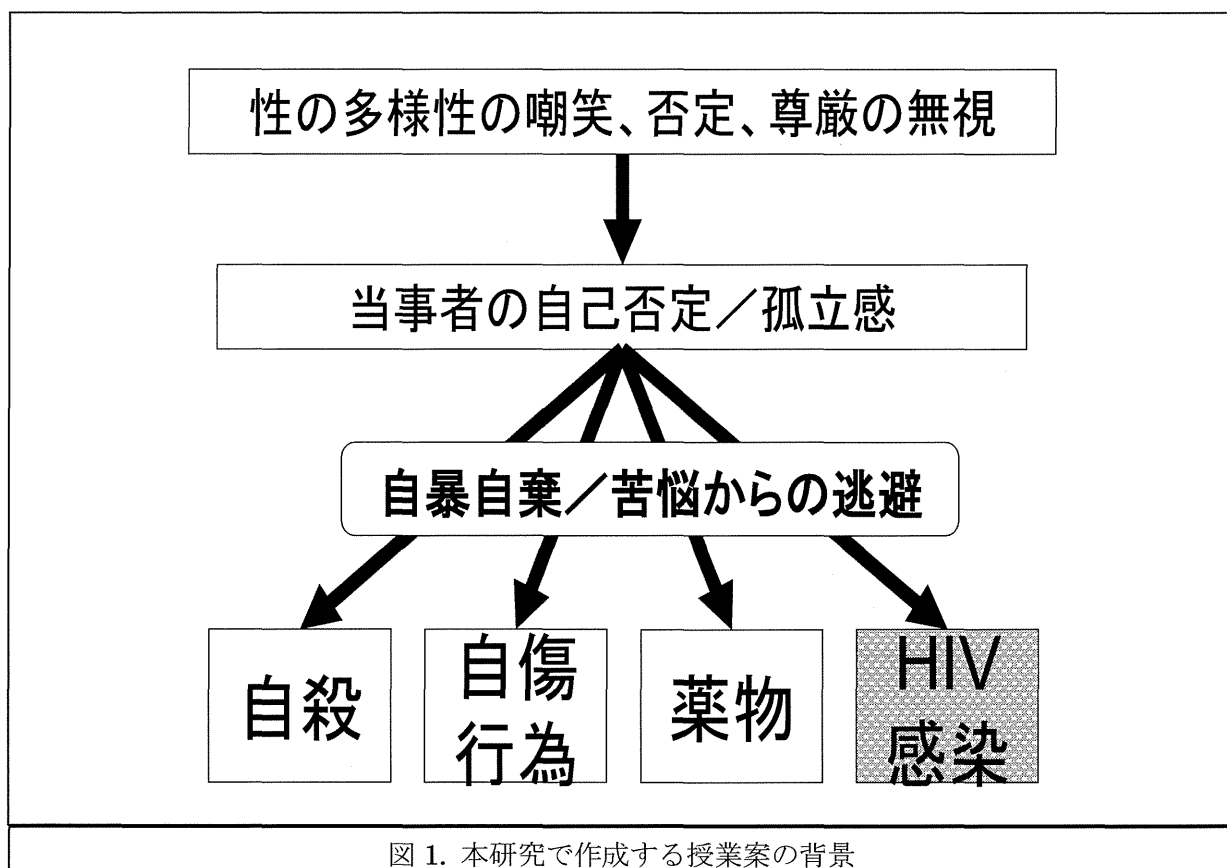


図 1. 本研究で作成する授業案の背景

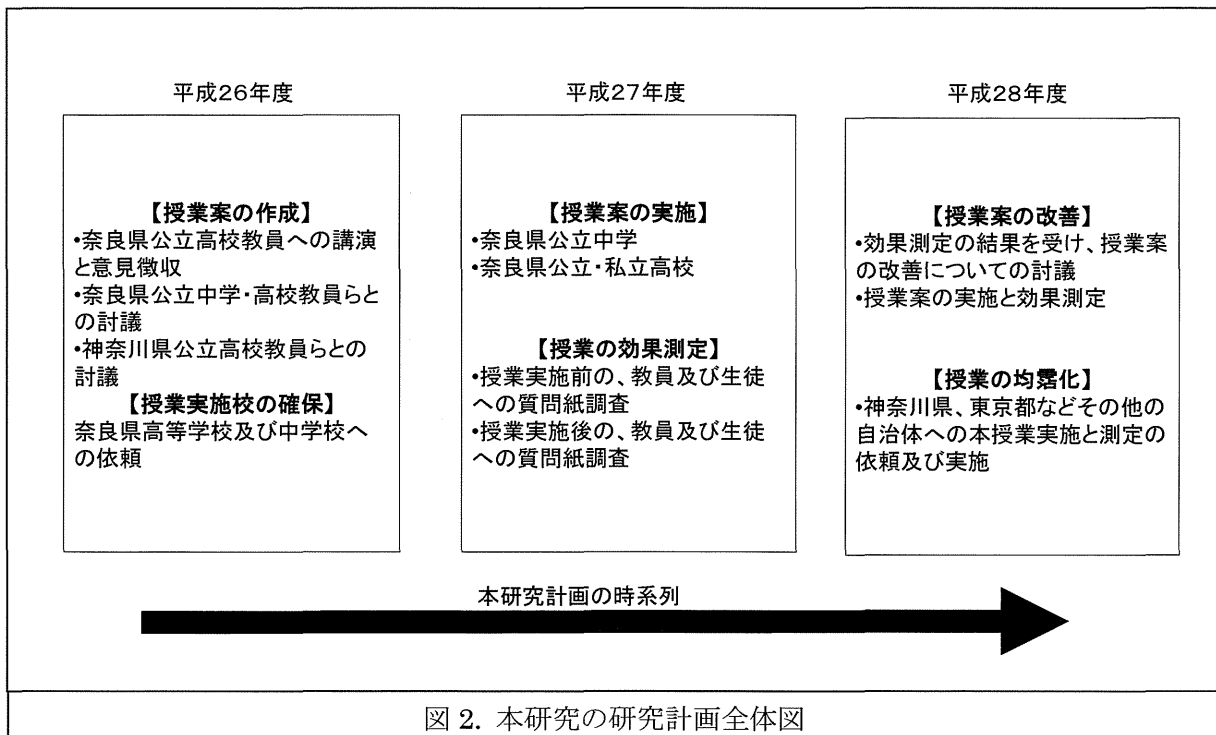


図 2. 本研究の研究計画全体図

不健康な行動や結果につながらないための予防となると考えられる。

したがって、本研究では、学校において、性的指向や性同一性など、さまざまなセクシュアリティについて特化させ、これをテーマとする HIV 予防教育の授業案を作成し、それをもとに授業を実施し、その教育効果を評価することを目的とする。

さらに、本授業案を教育効果と照らし合わせて修正を試み、より効果の高い結果が得られた授業案に関しては、均霑化を視野にいれ、わが国の地域性にかかわらず、どのような学校においても使用できるよう、いくつかの自治体への協力を得て、その効果がどの地域でも見られるものとなるのか否か確認する。

本研究の全体的な計画に関しては、図 2 に示す。このように、本年度は、授業案を作成することを第一義の目的とするが、来年度にはこの授業案を実施してもらい、その教育効果を測定することが目的となり、最終年度には、その教育効果がどの地域においてもみられるのか否かを検討するこ

とが目的となる。

B. 研究方法

【研究協力者】

来年度に予定している効果測定のための授業案を作成するために、奈良県高等学校人権教育研究会所属の人権担当高校教員と、中学の教員 2 名、及び神奈川県公立高校教員 2 名から協力を得た。

なお、奈良県の高等学校教員に関しては、奈良県高等学校人権教育研究会内に「多様な性についての人権学習教材検討部会」が発足され、分担者が作成した指導案について、現場の教員 (12 名～51 名) から意見を徴収する場が設けられた。また、それと並行し、神奈川県の高校教員 2 名からも同じ指導案について意見を徴収したのは、教材の偏りを排し、より均霑化に資するためである。

【教材作成のための検討会】

今年度は、7 回の検討会を持った。表 1 にその会議概要を示す。

教材作成は、研究分担者が作成した授業案に対し、教員が検討を加え、授業として不適切な点は

表 1. 授業案作成のための今年度の検討会概要

教員人数		
第1回	8	奈良における初会合。教員の協力体制に関する検討。
第2回	2	神奈川における初会合。分担者作成の授業案につき、助言をもらう。
第3回	37	奈良における「拡大学習会」。分担者の講義、及び授業案の検討。
第4回	2	神奈川における検討会。3回目を受けて修正した授業案への助言をもらう。
第5回	51	奈良における分担者の講演、その後、本研究への参加協力校の募集。
第6回	12	奈良における検討会。4回目を受けて修正した授業案への助言をもらう。
第7回	12	奈良における検討会。6回目を受けて修正した授業案への助言をもらう。

ないか、授業のやりやすさや難しさの点に関してはどうか、など多角的に意見を出してもらう形式を取った。出された意見は、電子データとして残した。また、奈良における第3回、第5回については、教員に対する多様な性の理解を深める目的で、分担者による講演を行い、学校教育の中で、特に授業として多様な性を取り扱っていくべき根拠について話した。その後、研究協力のための募集を行った。

C. 研究結果

1. 授業案の流れ

授業は、現段階では2回に渡るものとして設定された。

【1回目授業案】

1回目の授業の目的としては、以下二つが設定された。①セクシュアリティは、さまざまな要素のグラデーションの組み合わせであることを理解する。②自分のセクシュアリティについて振り返り、どのようなセクシュアリティも尊重されることを学ぶ。

1回目の授業案では、自分自身のセクシュアリティについて理解するという自己理解に焦点を当てた授業を展開する。そのため、ワークシートを用いて自己理解を進める。特に、セクシュアルマイノリティの当事者の生徒にとって、侵襲的な時間にならないように、先にセクシュアルマイノリティに関する肯定的な写真を教師が紹介し、ある程度、教室内で肯定的な雰囲気を醸成させた後、「心の中で」自分のセクシュアリティを振り返ってもらう。また、ワークシートを生徒が目視し、自分がどこかと考えている間は、教師が何度も「どこにつけても正解」であることを再三保証し、すべてのセクシュアリティが肯定されるよう、注意深く配慮する。次に、「今教室にいるすべての子どもたちが、多様な性のグラデーションの一部である」ことを理解するため、さまざまなワークシートの結果を教師が事前に用意して紹介し、二人として同じセクシュアリティを持つ人はいないということを体感してもらう。このことによって、生徒に「本当に全ての人が違う」ということを実感してもらい、友達も、自分もすべての人が違うことを理解させる。そして、ワークシートで振り返った自分のセクシュアリティが肯定されることを保証し安心してもらい、さらに「自分のセクシュアリティが大切であり、大切にしたいように、他人のセクシュアリティも大切にする」、

と自己尊重と他者尊重を学ぶ。

授業の流れとしては以下である。1. 導入部、2. 展開①（多様なセクシュアリティに関する肯定的なイメージを伝える）、3. 展開②（セクシュアリティの要素を理解する）、4. 展開③（自分のセクシュアリティを理解する）、5. 展開④（他者のセクシュアリティを尊重する）、6. 振り返り。

【2回目授業案】

2回目の授業の目的としては、以下二つが設定された。①セクシュアリティの多様性が否定されると不健康な結果に、肯定されると幸せな結果になることを知る。②自分と友達のセクシュアリティの在り方が違うということを前提に、違うことを尊重し、肯定できるようになる。

2回目の授業案では、1回目を踏まえ、一人一人のセクシュアリティが違うことを理解した後、他者のセクシュアリティ尊重をさらに踏み込んで理解するため、グループワークを中心に、授業を展開する。多様なセクシュアリティが尊重されずに「違うことは否定されること、無視してもいいこと」と人々が差別意識を抱いた場合に、どのようなことが起こりうるのか、実際に日本で起きた、MSM当事者が公園で撲殺されたという事件を紹介し、1回目で紹介したセクシュアルマイノリティに関する肯定的な写真と対照化させて考えさせる。そして、セクシュアリティの多様性が否定されると不健康な結果（HIV感染リスク、違法薬物へのアクセス、リストカットなどの自傷行為、自殺等）に、肯定されると幸せな結果（1回目に呈示した肯定的な写真）になることを理解させる。その上で、セクシュアリティの多様性を尊重するには、自分にはどんなことができるだろうかについて、グループで話し合いの時間を設け、各々考えさせるという授業とする。セクシュアリティは、友達も自分も違う。そして、隣の人のセクシュアリティを尊重しないと、殺人にまで至ることが実際に起きていたことを理解させ、どのように隣の人のセクシュアリティを尊重できるかを考えることで、他者尊重を学ぶのが第2回目となる。

授業の流れとしては以下である。1. 導入部、2. 展開①（セクシュアルマイノリティが差別を受けてきた事実を知る）、3. 展開②（セクシュアルマイノリティに関する差別語を理解する）、4. 展開③（性の多様性の否定化及び非可視性による孤立や自己否定がHIV感染リスクなどの不健康さを引き起こすことに気がつかせる）、5. 展開④（セ

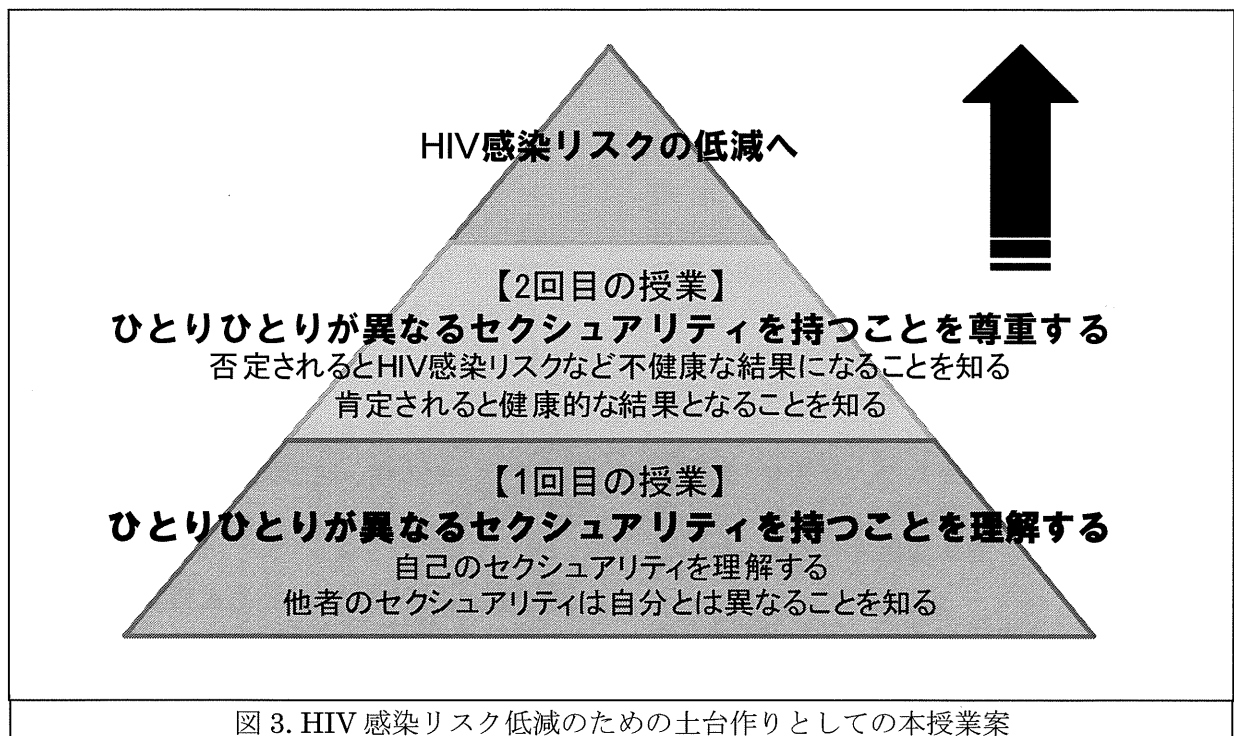


図 3. HIV 感染リスク低減のための土台作りとしての本授業案

クシュアルマイノリティ差別を蔓延させてきたメディア情報を鵜呑みにしない批判力をつける)、
6. 展開⑤（性の多様性を尊重するためにはどんな雰囲気を作ればいいのか生徒同士で考えさせる）、
7. 振り返り。

1回目の授業と2回目の授業のHIV予防教育としての位置づけを図3に示す。このように、「自己のセクシュアリティ尊重」と「他者のセクシュアリティ尊重」を学んでいくことによって、HIV感染リスクが低減されるよう土台作りすべく練られた授業案となっている。

2. 教員から徴収した意見

本格的に大多数の教員から意見徴収を行ったのは、第3回の奈良における拡大学習会のときであった。このときは、分担者作成の授業案をもとに小グループに分かれてディスカッションをしてもらい、その後、グループごとに意見を集約し、それを徴収した。

【奈良における第3回目の検討会】

<授業に入る前の懸念や教員の持つ態度についての意見>

- ・ 生徒にどう下ろすか、導入部分の意見が多数出た。ワークシートを出す時(当事者もおり)、どう受け止め方があるのか懸念がある。これをする意義について、教員研修をして理解を進めていくべきである。教員の固定観念(保健体育-男女の体の仕組み、しかしこの授業案ではセクシュアリティはグラデーションと

して扱う)を崩し、個性の尊重へと下ろしていかないといけない。

- ・ 指導案に入る以前の問題がある。目の前に当事者の生徒がおり、それも自分で受け入れていない状況の生徒であれば、担任が何も知らずにHRで本授業を扱うこと自体、難しいのではないかと。
- ・ 教職員の意識というのが一番大きい。どの方向に授業が流れていくのかというのはわからないことがある。教員研修ができていないと授業が変な方向へ走っていく。どんな人でもできるようなものであれば、もっとかつちりとした授業案でなければならない。
- ・ グラデーションということが話題になっているのは知っており、多様性を伝えることが課題だということは理解しているが、このような課題について、いろいろいるということを教えられるかどうかという心配がある。AとBを分かり合いましょうという簡単な話ではない。しかし、多様性はあらゆる人権教育にも通じる。嫌悪感情も同様であり、難しいことだが伝えるべきことであることはわかる。
- ・ 当事者がいる中で授業の展開が難しいというのは、生徒からの発言の中で「女同士エロイ」、「ホモはキモい」など授業中に生徒から出てきた時に、当事者が傷つくのではということ懸念するからだ。
- ・ なかなか教員自身では授業をしにくいテーマなので、外部から講師を招くしかないというような思いがある。

<授業案に対する具体的な意見や助言>

- ・ 「アイスランドの首相は・・・」という成功者を出すのではなく、社会的に立場の弱い人でも、どんなセクシュアリティを持つ人も尊重されるというのが人権教育の要である。同性カップルの結婚式の様子に対して、みな喜んでいるような写真を出すなど、周囲の理解が得られているということを示すような映像を出すのはどうか。昔は自殺願望があったが今は幸せというような当事者が出てくる映像が必要ではないか。
- ・ 指導案に対する要望として、カタカナ言葉が多すぎるというのが挙げられる。「セクシュアリティ」などは、日本語に直してやっていけないか。
- ・ HR の進め方としてセクシュアルマイノリティや LGBT といったカテゴリーよりも、「グラデーション」を感覚の問題でつかめるようにしたほうがよい。そうでないと、マジョリティだと思っている生徒たちがひとつごとのように受け取り、好奇だけの目でみてしまう。すでに情報としてある統計を示したりして、できるかぎりグラデーションをみせてから、最終的にセクシュアルマイノリティのカテゴリーについての言葉での説明へと流れるほうがよいのではないか。
- ・ 導入部は、主題をきちっとさせるために、映像資料を導入で見せるのはどうか。
- ・ 全体の指導案の流れについては、知識的な理解について、一方的に教員が教える形になっている。できればパーソナルな、カミングアウトした生徒の話を織り込むほうがよい。人権作文に性同一性障害のことをかいた子がいた。そういう子どもの生の声を教材の中に入れたらどうか。
- ・ バリエティタレントを出さないのは難しい。最初に当事者のビデオを見せるなどをして、いろんな人がいるということを先に伝えたほうがよい。嫌悪感情は教える方も抱く。これをどう減退させるか、励みになるものがあればよい。
- ・ 地図の部分は、これを導入に使っても良いのでは。

―特に、ワークシートに関して

- ・ ワークシートでは、性役割を先にやってから、性同一性、性指向へすすめたほうがグラデーションを理解しやすいだろう。性的な魅力は学校教育では難しいかもしれない。恋愛感情、

仲良しなどならやりやすいのではないか。

- ・ ワークシートは、性同一性の強さがどれくらい・・・という 5 段階にわけているが、「ある」「ない」にして、あるーないに線を引いて、好きなところに印を入れるということをしたほうがよいのではないか。
- ・ ワークシートについては、グラデーションを心の中で丸をつける、というこの基準がよくわからない。

以上の意見を第 3 回検討会の全体会で聞くことができた。その後、感想文として書かれたものは以下である。

<討議形式での検討会への肯定的評価>

- ・ グループ討論で具体的イメージができたようにも思う。いろいろ心配することはあるが、まずは HR で実践してみることで練り上げることが必要だと思った。
- ・ 良い研修でした。ミーティングの柱に、「指導案」を基本に話し合うことがあって、意見を出しやすかった。多くの先生方から意見を聞くことができたのが成果。性の多様性は自然の中のテーマということだと思った。
- ・ 多様な性についての人権学習は、私にとってまったく初めての内容でした。提示された指導案についてグループで意見を出し合うことができて、たいへん有意義でした。今後、これをどのように作り上げていけばよいのか、私も考えていきたいと思います。
- ・ 知識的な面も増えたけど、話し合いができたので、自分でも考えられた。今、本校でやっている LHR の中で「ジェンダー」の LHR が一番人気がなくて、「多様な性」も難しいかなあとと思います。時間数が少ない中、どのテーマを扱うかを選ぶので、いつも悩みます。教員研修がまず最初で、その中で先生方の意見をうけてから考えていきたいです。
- ・ 性について悩む生徒がいる以上、必ずどこかで話す必要がある話題ではあるが、自分が悩んでいることが受け入れられないことも多く、扱い方に気をつかうな一と思うテーマでした。提示された指導案をもとに協議するという学習会ですが、指導案も参考になりましたがそれに伴う多くの先生方の意見等を伺うことができ、本当に勉強になったと思います。

<さらなる勉強、研鑽を積むことへの意欲>

- ・ セクシュアルマイノリティについての学習の

必要性を感じました。

- ・ HR 展開をするには、まだまだ研修を積む必要があると感じました。
- ・ 本校で問題となっていることなので、多様な性については、たいへん勉強になりました。
- ・ 本日参加して、私自身及び現場での研修が必要だと感じました。
- ・ 目の前にいる生徒への対応等、お聞きしたくて参加させていただきました。まずは、職員研修から始めたいと思います。
- ・ 今まで 2 回ですが、性についての研修（たぶん日高先生でした）を受けて、目からウロコでしたので、すべての教員に研修の機会を与えてほしいと思いました。部落問題を学習するときも、やはり何十年も前からの先輩からの取り組みがあつてできているものなので、勉強していきたいと思います。
- ・ セクシュアルマイノリティ人権教育について考える機会を与えていただき、ありがとうございました。教師自身が肯定的な感覚をもつこと、また、自身の嫌悪感とどう向き合っていくのかの姿勢が、子どもたちに伝わるものだと思います。（教師も学んでいく姿勢）※気づくことで終わりではなく、性について学ぶことが自分の生き方について学ぶこと、の押さえをどうするかが課題だと思います。

<重要テーマであるとの認識>

- ・ なら国際映画祭で「アゲインスト 8」見ました。よかったです。その後のパネルディスカッションでも、教育の場での大切さについて確認されました。クラスにも LGBT の生徒おり、授業でも性同一性障害の生徒おりで、大切な課題と思っています。
- ・ 自分自身の不勉強と、取り組みに対する難しさを感じました。ただ、他の人権課題と同様に、実践する者が、いかに信念を持って行えているかが大切か感じました。
- ・ 校内人権講演会で当事者の講演を行ったことがあります。この講演は、学校に在籍する生徒のことを考えて、必要に迫られたものでした。当事者の生徒にも、他の生徒にも意味があったと思います。
- ・ すみません、授業づくり、小学校には厳しいでした。ただ本人はどう思っているのかわかりませんが、（この子は？）と思える子はやはり実際います。※世界地図は知らなかったので勉強になりました。小学生はバラエティー

の性に対する笑いにどっぷりつかっています。しかたありませんが、悲しいです。なので、このような授業を正しく受け入れる事の出来る感性を、小学校では育てていきたいと思えます。

<今後への戸惑いと期待>

- ・ 近年、話題になりつつある課題だけに、私自身も HR 展開のイメージが全くつかずの状態であることを再認識しました。でも、生徒の中に、この問題に悩んでいて、いつ相談に来るかも分かりません。そういう意味では、考えるきっかけを本日与えていただいたことに感謝いたします。
- ・ しんどい生徒のいる中、この授業をどの場面でもどのように組み込んでいいのかわからない状態になりました。まわりの生徒をポジティブに理解させるということは非常に大切で、指導案は参考になりました。
- ・ 実際に HR で取り扱うためには、まだまだ自身の認識を高めていかなければならないと思いました。社会の男・女の区分けにどう対応していけばよいかを、当事者の生徒にアドバイスできるのかどうか心配です。
- ・ 本日、参加させていただいたのは、現在、このことについての指導で迷っていたからです。できましたら、より具体的な指導をいただけたらと考えています。よろしくお願いします。

<授業をする際の留意点>

- ・ 本校は工業系とビジネス系（商業系）で、クラス内の男女比が正反対なので、どのクラスで授業・HR をするかで、導入も注意点も異なるように思います。高校では、それぞれの高校での生徒の層に応じて切り込み方を変えていく必要があるようです。／・例えば、すでに特定の生徒がいじられ、からかわれている場合は、私なら確信をもって、教員が毅然と生徒集団に介入するだろうと思います。
- ・ 実際に教材化していない状態で、教材化をきっちりとしていかなければならないと常々考えています。一番感じているのは、教材化の中で当事者の声（セクシュアルマイノリティの）を全体の生徒にどう伝えるかだと思っています。
- ・ 《意見》個人的に気になったのは、指導案の目的の部分です。というのも、多様性の尊重は、生徒たちにとって自明のことではないの

で、なぜLGBTにおいて多様性が尊重されなければならないのかを明確にしなければ、生徒に残らないのでは...と感じたからです。《感想》何はともあれ、冒頭のETVの映像資料は秀逸でした。見せ方しだいでは偏見を破壊して余りある人権資料になるのでは、と感じました。先生の研究は大変意義あるものだと思います。頑張ってください。本校でも取り組んでいきたいと思っています。

【奈良における第5回目の検討会】

この回では、なぜ授業でセクシュアルマイノリティが扱いにくいのかを検討してもらった。この回では、分担研究者が講演を行い、その後、グループに分かれて、授業で扱うことに抵抗があるのか否か、あるとすれば何故かについてディスカッションしてもらった。

その後、質問紙を配布し、「授業で『多様な性』を扱うことに抵抗はありますか？」という問いについて、「とてもある」、「ややある」、「あまりない」、「まったくない」の4選択肢のうち1つを回答してもらった。

結果については以下である。「とてもある」が3名(7.7%)、「ややある」22名(56.4%)、「あまりない」10名(25.6%)、「まったくない」4名(10.3%)。割合については、図4に示す。なお、検討会参加者のうち、すべての人がアンケートに回答しているわけではないので、合計数値が参加人数と合致していない。

また、「とてもある」・「ややある」を選択した人については、①どんなことが引っかかっているか、②どんなことで、その抵抗が薄れるか、について自由記述をしてもらい、「あまりない」・「ない」を選択した人については、授業をどのように進めていけそうかについて問うた。以下がその記述である。

＜「とてもある」、「ややある」の選択者＞

①どんなことが引っかかっていますか。

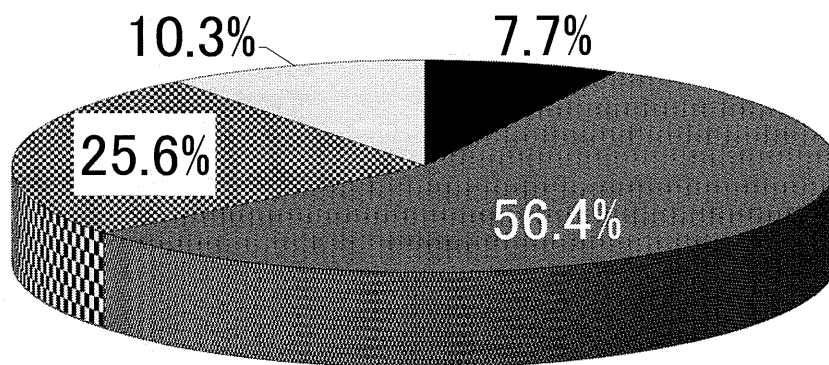
とてもある

1. この年齢までに受けてきた、あるいは体験してきたこと、教育や人生の仕込まれたこと。その中で、「性の多様性」については不可思議なことばかりである。
2. 学校の風土(教員文化)の中での実践の難しさ／同質性志向の高い教員文化を受容できるかどうか？
3. まず、自分自身がこの内容についてあまり知らないからです。また、このような人たちに会っていないこともあります。

ややある

4. 悩んでいる本人が認めたくなく過剰な意識をもっていると思うとなかなかきりだせないのかなと思う。(拡大学習会で同じグループだった先生の話をきいて)自分自身の感覚であったり勉強不足だったり、という難点もありますが、話のきりだし方が難しいかな、と

図4. 「多様な性」を授業で教えることへの抵抗感 (N=37)



■とてもある ■ややある ▨あまりない □まったくない

思ったりもします。いるかいなかわからない状態でやるのも怖いし、このことでカミングアウトさせられることになった時にうまくまとめられるかも不安です。この授業のときに受け入れられず、しょんぼりして帰ってきて親から苦情とかもあるかも…。

5. 本日の先生のご講演の中にありました、レジューム 3 頁③の内容に関わることです。私が自分のクラスでこの HR を実施した時に、当事者の生徒自身がどう思うか、「教師の態度が生徒に大きな印象を与える」(終わりの方であった話)かが、最も懸念されることです。私の発した言葉やふるまいがその生徒にどう受け止められるか。そのことで生徒が今後、どういう思いで生きていくのだろうと。もちろん、そのために教員がもっと研修を積まなければ、と思うのですが。
6. 生徒の関心を一気にひくうまい手がないか探している。インパクトのある話、写真、ビデオなど。
7. ホームルームで、学年で、同一指導案を使うときすべての担任が快く実施しようと言ってくれるかどうか気になる。反対している人にどう対応するのか、ここがむずかしいと思う。
8. 扱うことで、その後何が起こるか不安。
9. 收拾をつける自信がない。
10. セクシュアルマイノリティの否定的感情や態度に対して問題化できるかどうか。当事者へのサポートになるかどうか。
11. 1 時間の授業で、嫌悪感のある生徒、セクシュアルマイノリティに否定的な生徒を 180° 転換させることはできないが、1° 程度でも良いと思って授業をして良いのでしょうか。そう言われれば、授業者は楽になります。
12. 自分の授業の展開の不味さで、逆の効果をまねいてしまうかもしれない。
13. クラスの中にマイノリティの子がいた場合マジョリティの子らの反応が怖い。
14. クラスの生徒が、自分の性について、まだ不確かな状態であると思う。教師が気づいていないだけかもしれないが、多様な性を考える下地作りが、まず大切で、それが不十分であれば「誰」「誰」とさがすことに興味が走ってしまうのではないかと思います。テレビのタレントの姿だけの世界と思う生徒も多いのではないかと思います。
15. 自分の中で教える「目標」「目的」が明確化

されていないと思う。

16. クラスの中に該当者らしき生徒がいる場合。
17. 資料 p.3 ③「ポジティブなイメージを持たせる」具体的手法がわからない。表面に表れず書き込み等で「あいつ、そうなんじゃね？」には「だから何？」は使えない。生徒の実態に大きく左右されると思います。特に 1 時間の授業では難しいように思います。
18. 職員の同意が得られるか。
19. 多様な性を抱える子どもの大半は表にあらわしたくないと思っているのではないか。我々教員として「多様な性」を肯定的に捉え、それを認める姿勢や今回研修のような知識は必要かと思うが、積極的な授業展開は自信もないし、難しいと思う。
20. 実際にセクシュアルマイノリティの人に面したことがないので授業でとり上げるには、わからない部分が多く、不安がある。
21. 「多様な性」の尊重は理解できていますが、自分の生活レベルで経験したことがなく、共感して語ることができない。
22. 多様な性を扱うことには問題はないが当事者が社会生活でどのように振舞えばよいかを考えることが難しい。
23. 自分自身が気づいていないフォビアがあるかもしれません。また、社会全体のこの問題についての意識が低い現状において、もっと研修を積む必要があると感じています。
24. 教材化するときどれほど周りの理解が得られるか自信がない。自分自身に疑問を持つ中で他者に理解を得させるほどの力量はないからです。ただし、資料 4 ページの具体的な問題状況では、見ては見ぬふりをするには許されない。これも一個人の権利であることを理解させることは必要だと思う。このように、問題提起されたときに討論するのはすべきであると思う。

あまりない

25. 教員の意識→職員研修が必要、男女共同参画。／・生徒への展開→人権教育部を中心に教科との連携で時間を確保すべきである。／・設備の問題→トイレ、制服等々の問題をどうクリアーするか。

②どんなことで、その抵抗が薄れるのでしょうか。

とてもある

1. 知識として 1 つ 1 つ疑問をつぶしていく、自己の改革をするしかない。自分の中の性に納

得させることが出来るかどうかでしょうか。

2. 教員の意識改革→研修の充実
3. いろいろ知っていくことや実体を知ること
で抵抗が薄れていくと思います。

ややある

4. 高校生では、けっこうこういうマイノリティの自己否定であったり嫌悪感情だったり
がすでに身につけてしまっていることがある
と思います。けっこう小さいときからこう
いう教育がなされてもいいのかな、
と思います。また、保護者啓発も必要かな、
と思います。
5. いろいろ情報を集める。
6. どのような授業をするときも、1時間話
ができるように準備しますが、この問題
で授業するのはかなり準備がかかり
そうです。デリケートな問題でもあり
ますので、この問題で1時間授業を
するのは現段階ではむずかしいです。
でも、大切な問題なので、授業の中
で(地歴・公民)時々個人的には、1
時間この学習にさくよりこの問題に
ついて触れる頻度を増やした方がよ
いと考えています。何かのたびに
触れることで、マイノリティの生徒
に何か発信できると考えています。
7. 自分のことを誰もがハードル低く話
せる雰囲気为学校全体のものとなれば
8. 生徒との人間関係。教師に否定的
な生徒が多い中では、自分自身の偏
りを自覚していく作業を通して、生
徒に伝えていくことができにくいと
感じる。
9. 自分が学習するしかないです。
10. みんなが慣れること。
11. よくわかりません。すみません。
12. 学習ですね。子ども(生徒)が、
ひとりひとりの存在が大切にされ
るための何か良い教材があれば良
いです。
13. まず、その生徒との話し合いが
大切。ふれてほしくない!と本人が
言えば、今はとりあつかわないかも
14. 生徒の実態に即した具体的な手
法が見いだせたら...
15. 職員研修。
16. 「性教育」の中に位置付けて教
材化をすすめる方法が考えられる。
17. 情報収集などを重ねていくしか
ないかなと考える。
18. 従来の性への認識を構造主義的
に相対化する必要はあるのでしょうか。
もし私が授業をするなら、どうす
れば幸せな生き方、考え方を

をもつことができるのかを考えなが
ら展開していきます。

19. 社会構造が変わってくれること
が望まれる。またそのように努力
したい。
20. やはり、研修を多く積むこと
になると思います。

<「あまりない」、「ない」の選択者>

①どのように進めていけそう
でしょうか。

あまりない

1. 目標として LGBT について教
えるのではなく、性のグラデー
ションを教えることから始まる。
社会、自然は2極対立でなく、徐
々に変化をくりかえすことを意
識することで LGBT もその中
にとり入れていくことができる
のではないかと。
2. 「扱うべきでない」という意味
では抵抗はまったくない。ただ、
勉強不足ゆえに、「不安」はある。
いずれにしても、軌道に乗るま
で数年はかかると思う。
3. グループで話し合ったこと／長
期的にとり...他の人権問題<障
害者、部落、人種(白人、黒人
など)>も話していく。／・これ
らの話をしていくと、受け入れ
る気持ちが更に出てくるのでは
。／・どの問題も、身近にその
人がいればそう問題ないのでは
。／生徒が何か気付いてくれる
かも。／授業として...チャカ
す生徒が、そのままチャカして
もいい。落ち着いてから本題に
入る。／1.友だちがそうなら?
／2.10年来の友だちなら?
4. カミングアウトする生徒が出
てきた時、どれだけサポートで
きるか不安。知識だけを知らせ
るだけに終わらないか。
5. ①まず職員研修をする。職員
が抵抗を持ちながら HR をし
ても形式的になってしまうので
(どの HR も同じですが...)／
②次に時間の確保。既に色々
な人権の HR が入っているので、
どれを削るかが難しいので、
新たに人権 HR を増やす。増
やすには職員の理解が必要。
6. 教科・科目での授業のなか
で、今までもそうしてきたし、
これからもそうするつもりであ
る。
7. 特に具体案はない。
8. マジョリティがマイノリティ
を攻撃するという構造は、他の
差別と共通するところがある。
差別をしてしまう人間の心理
をわかったうえでそのことに
ブレーキをかけることが

できるための知を得るといふ形で他の差別問題と並べて行えると思う。

ない

9. 性教育は多教科横断型なので、その中に様々な性のあり方を入れることで特別無理は感じない。
10. 自己尊重、他者尊重。
11. 抵抗はないが、人権的課題が多岐にわたる現状では他者を大切にす(他人を尊重する)展開の中で取扱いがベストかと考える。外国人と日本人、男性と女性など人権的課題全般。
12. 現在、学級副担任ですので自学級でHRとして授業実践はできませんが担当科目の授業などでおさまるのであれば時間的に可能です。内容については学校または校内人教部会で相談が必要だと考えます。内容的には私の友人たち(LG ともにいます)について話すこともできますし、生物学的な立場から医学的な研究成果の紹介など多面的に考えさせたいとも思います。宗教や社会学的な部分についてはいま少し研修が必要かも...です。

以上の意見を第5回検討会の全体会で聞くことができた。その後、感想文として書かれたものは以下である。

<自らの抵抗感について>

- ・ やはり大切とはわかっていても難しい話とします。昔はあまり言われてなかったのはどうしてなのかなというのも気になりました。あと、宗教の問題も。
- ・ 自分の中のフォビアとどう向き合うかが問題です。このフォビアは文化(時代)によって作られたものなのか分析したい。先日、高2女子3名とこのテーマについて(性の多様性)話をしたときその生徒達の方が柔軟な考えをもっていたので。わざわざ東京からありがとうございました。また、いろいろと大変だと思いますが、がんばってください。
- ・ この問題は学校風土の問題なのでしょうか？

<今後の展望について>

- ・ 難しいと思う課題について、考える機会を与えていただきありがとうございました。小グループでそれぞれの思いが話せて少し楽になりました。社会の実態から、話していくべきときになっているんだなあと思います。
- ・ 実践例があるとありがたいです。様々な実情

にある学校で実践いただきたい。

- ・ とにかくやってみなければ課題もみえてこない。
- ・ 何かと参考になることが多く勉強になりました。
- ・ いちばん小さな社会単位である家族に理解してもらうことがマイノリティの方たちにとってはいちばんの支えになると考えられる。学校としても(関係する機関としても)そこがあるとないでは次の一步の踏み出し方もちがってくると思う。
- ・ 紛争、戦争、飢えに直面している、生きるのが精一杯の人達が直面している課題ではないかと考えます。恵まれた環境で生活している我々の課題です。だから、生徒達には「生きる」との観点で切り込んで行く必要があると思います。生き死にの問題。命を大切にすとりくみかと考えます

【奈良における第6回目の検討会】

この回では、実際に来年度に授業を実施する意欲のある教員のみが集まり、検討会をした。3グループに分かれ、研究分担者が修正をした授業案について討議が行われた。

高校教員からの意見

<ワークシートについて>

- ・ ワークシートについて、わからないものがある。性同一性の「その他」はどう捉えていいのか、教員のほうもよくわかっていない。
- ・ 性役割は、男性役割などの性格・趣味などの個人によって女性男性の趣味といったものは、捉えかたが異なるし、今そのような役割があるのだろうか？キティちゃん持っていたら女？少年誌読んでいたら男？など、そういったものは、高校はもうシャッフルされているんじゃないか。もう、男の仕事、女の仕事などの区別はなくなっているんじゃないか。
- ・ 性的指向の、「経験がない」というのがよくわからない。これは要らないのではないか。経験がある、ないの二つしか選べないのでグラデーションも感じさせないので、ワークシートの趣旨が変わってくるのではないか。性的指向が誰にも向かないというのは、わからないというか、「どういう意図があるのか？」と生徒たちが迷わないだろうか。
- ・ 5年後、10年後にまた自分がこのワークシートをしたときに、また変化があるかもしれない

いということ、生徒に伝えたほうがよいのでは。そのことが、性のグラデーションの固定化を防ぐことにつながるのではない。

- 心の中で丸をつけるということについて、マジョリティにとっては、いろんなことがあるというのを可視化できたほうが、生徒にはしっかりと理解される。したがって、得点化するなど目に見える形にしたほうがよい。たとえば、5要素をグラフ化する、レーザーチャートをつくる、などはどうか。匿名で作ることが重要。このために、参加が任意のスマホからのシステムをつくるのかはどうか。

<授業案全体に関して>

- 50分で多様な性を認めるということがおさえられるような授業案にはなっていると思う。しかし、その後の展開がしんどい感じがする。この次に何につなげていくのが望ましいのか。
- 授業案で有名人を出すほうがよいのではないだろうか。たとえば、ゲイであることをカミングアウトしたアップルの社長や水泳選手だったイアン・ソープなどは、良いイメージなのではないか
- LGBTを先に出してしまうと、他人事になってしまう危険性があるので、延長線上に自分があるということを生徒が実感するためにも、おおむねこの授業案はやり応えはある。しかし、導入部の地図は唐突感が否めない。この話をしてしまうと、欧米と比べて・・・という隠れたカリキュラムになってしまうことも考えられる。はじまりは写真からでよいと思う。もし、生徒たちが否定的に騒いだとしても、これは制止可能のものであって、そんなに心配する事ではないだろう。
- 最初に生徒たちから笑いが出たときに制止することは大事なことである。生徒たちが何故笑うのかというと、正面から受け止めていないため。このことをもろに受け止めさせるのはつらいかもしれないが、受け止めさせることは重要だろう。学校で扱うと必ず正解があると思われてしまうのでそれは問題だ。
- これまでの授業では、「もしも友達が LGBT だったら」という DVD を見てもらい、話し合いをし、ワークシートをしてもらい、感想を書くという流れで実施したことがある。ただ、「この次どうしようか」というのがあった。この「何をすればいいのか？」を当事者に聞けばよいのだという発想がわれわれにある。

人権担当でやってきたので、部落の人にも在日外国人も「では当事者に聞きましょう」となる。僕たちができることはそれだと。否定したり押し付けたりするのはだめだとわかる。

<どの授業時間を取って授業をするか>

- 授業の一時間を使うとなったら、たとえば現代社会の授業で行うことが可能だ。地図はその授業であれば違和感がない。他は、保健体育、関連の授業でも扱うことは可能だろう。
- アイデンティティは、現代社会・現代社会の授業で扱うこともできる。これだと性的な側面からのアイデンティティを探索することができる。
- 日本史・世界史は、焦点を変えれば可能だろう。しかし、受験校なら無理とも考えられる。オスカーワイルドが同性愛の罪で投獄されている。日本は明治までない。女装の歴史とか、そういったことを歴史の授業で扱えるだろう。
- HR や授業の場合は、カリキュラムで指導案が必要となるが、ワンポイントで教員が話すことならば、朝の会とか帰りの会とかあるいは、担任が自習監督にいったときとか、エイズの話をするなどが可能。たとえば、「12月1日は何の日か知っていますか」とか学級通信であつかうとか、そういう入れ方をするができると思われる。生徒は、期待以上に教師のコラム欄だけは読んだりすることがある。それに使えるリーフレットやチラシを作っておくというのも一つの手立てではないか。体系的じゃなくても、先生向けのネタ帳をつくるという手もあるだろう。

中学教員からの意見

<ワークシートについて>

- このワークシートと似た、性別表を20人くらいにやってもらったことがある。線上からはみ出したり、動きまわると書く人もいれば、ぐるっと丸を囲う人といういろいろだった。「本当にいろいろなんだ」というのが伝わるほうがよいのではないか。詳しく説明をするとカチカチのものが出てしまう。しないと自由なものが出てくるので、それを引き出せるようにしたほうがよいと思う。
- LGBT というのを出さずに、自分のセクシュアリティを考える、というのではなく、「この人はゲイ」とカテゴリーに入れるというように、こういったことを入れたほうが、自分は

どれなのかと自分探しをしている生徒には有益になるのではないか。

<授業全体に関して>

- この内容を1時間で扱うのは無理。3時間は必要だろう。
- 同性カップルの写真を提示するのはよいだろう。幸せそうな写真、これは何の写真？と中学生に対してなら、その場で反応を求めたほうがいい。まずは、多様性を認めにくい、マイノリティがいきづらいのはなぜか、ということテーマにするだけでまず1時間が必要になる。
- 中学は特に、男子の集団、女子の集団というくくりで中学生生活が成り立っている、それが子どもたちの意識に反映されている。
- いろんな家族がある、という絵本などを使っておこなうことを前提に行うほうが中学生にはふさわしいのではないか。

<教員の授業姿勢について>

- 人権学習のベースになるようなものできたらよい。
- すべての人にやってもらう場合、偏見を自覚している教師はできない。男女混合名簿でも広まっていない。→セクシュアルマイノリティが課題になっていない状態
- マイノリティの子どもは、先生は仲間になってほしいわけではなく、味方になってほしい。
- 将来のさまざまな出会いの中で、自分のセクシュアリティが変わっていくものなのか。もしそうであれば、「マジョリティだと思っている君たちも今後変わるかもしれないよ」ということをいったほうが、セクシュアリティの多様性を受け入れやすくなるのではないか。しかし、そのことによって、セクシュアルマイノリティだと自覚する子どもに対し「いつか君もマジョリティに変わるよ」というメッセージを送ってしまう危険性もあるので難しい。

<中学・高校のHIV予防教育として>

- 性行為もさまざまだということを言えるようにしないとイケないだろう。その上で、コンドームをつけましょう、性感染症に注意しましょうということを言えるような土壌をつくりましょうということだ。照れもせずはつきりと言った方が、生徒たちはちゃんと受け取

るのに、教育者のほうが照れるから、伝わらなくなる。教育者としてどうかと。

- この問題は、中学から早く言った方がよいことだ。
- この時間の中に、どう入れ込むのか、かなり悩ましい。
- 男女間のエイズ教育はされているのに、男性同性間についてはぜんぜん教育に組み込んでいない。自分を大事に思えないことが薬物、エイズとつながっていく。人権とエイズと両方を扱っていかないとイケない。
- そのための基盤づくりとして、この授業を生徒が受けるのは必要。
- 奈良県で行っているデートDV予防講座は2時間枠(2時間連続)となっている。これは、外部講師による講義とロールプレイから成っており、その後、担任ができるようになるというものだ。このように、しっかりした授業案ならできるのではないか。一般的に出前授業は2時間枠でやっている。この4年、出前授業でやっていたので普及する。プログラムがかちっとしていたので普及したのではないか。
- まずは1時間枠をとにかく確保することが重要ではないのか。
- 20代の教員は、「オカマ」はだめだとわかってきている。50代はまだまだ。いい続けなくては仕方ない。ここ10年で50代の教員の入れ替わりがあるので、今は過渡期。どうコマを確保するかは重要な課題。
- 1時間授業案、2時間授業案と両方のバージョンの授業案を作るのはどうか。
- 学校の中で普通に話ができれば、保護者に啓発ができるはず。LGBTでもエイズについてでも、少数でも理解ある保護者がいれば、続けていけるだろう。性の多様性理解を生徒だけに教育するだけではだめだと思うんですよ。親が無理解というのがある場合がある。親向けに教材を発信してもいいかもしれない。

【奈良における第7回目の検討会】

今年度最後の検討会では、グループに分かれることはなく、教員全員が全体の中で自由に質問と意見をいう形式となった。主な検討点は以下であった。

- ワークシートをすると、心理検査をして判断されるような印象がある。
- ワークシートを実施するというスタイルは、

教員自身が「正解がある」と思ってしまう。どれも正解だと、どれも多様な性として尊重される、ということ強調しないと、教師も生徒も正しい正しくないに囚われてしまう。

- ・ 性同一性という用語は、聞きなれないのではないか。心の性、性自認を使用したほうが、わかりやすい。
- ・ 性同一性は、性のアイデンティティという意味なので、すでに高校ではアイデンティティという用語を習っているので、本来の用語のほうが深い理解につながる。
- ・ 性的指向のマスターベーションの項目などは授業で取り扱いにくいのではないか。

D. 考察

本研究は、学校教育における「セクシュアルマイノリティへの否定化及び非可視性」に基づく、非尊重の風土や態度を問題視し、このような状況が当事者の自尊心を低下させ、引いては、精神的健康の著しい悪化、そして、HIV感染のリスクに繋がる性行動を導くという、先行研究を基盤に、「自己と他者を尊重する形で人間関係を構築する」ことを教育目的とし、自分のセクシュアリティが尊重されること、他者のセクシュアリティを尊重することを学んでいくことにより、HIV感染など不健康な行動や結果につながらないための予防をする授業案を作成することが一つ目の目的である。

そして、その授業を受けた生徒らが実際に、自己と他者を尊重するようになってきているのか、そのことによって、HIV感染に結びつくようなリスクのある性行動をとらない選択へと向かうのか、その教育効果を評価することを最終目的とする。

本年度は、その元となる授業案を作成するために、何度も授業案を練り直し、内容は堅牢に死守しながらも現場に即したものにすべく、現場の現役教員と討議を繰り返した。

<教師の抵抗>

本研究の協力を募るために行われた会合では、「どの程度、授業で多様な性を取り扱うことに抵抗があるか」について質問をした。その結果、「とてもある」、「ややある」が過半数を超え、多くの教師において、授業内で教えることへの抵抗が見られることが明らかとなった。その理由としては、①教師自身の知識不足と偏見への自覚(教職員の同意も含む)、②授業をすることで当事者を傷つけてしまうのではないかという不安(保護者から

のクレームも含む)、③周りの子どもたちを刺激し收拾がつかなくなるのではないかという不安、という3つに大きく集約された。逆に言うと、第6回、第7回検討会に参加した教員らは、①～③の点を問題視していないため抵抗がないようであった。

したがって、①～③への不安が低減されるような授業案を作成することが望まれよう。

<分担研究者作成の授業案の改変>

これまでの討議を経た結果、変更された主な点に関して表2に示す。

セクシュアルマイノリティに対する肯定的なイメージを抱いてもらうために、セクシュアルマイノリティであることを公言している政治家、歌手、アスリートなど著名人を紹介するという内容については、人権の観点から問題視された。これは、あたかも華々しい場で活躍をしている当事者のみがセクシュアルマイノリティであることを受け入れられているかのような誤解を生むためである。人権は、すべての人が有す、基本的な権利である。どのような立場であろうと、セクシュアルマイノリティであることを保証されなければならない。したがって、本授業案では、著名人を出すのではなく市井の人々を紹介することにした。

世界地図を出し、同性パートナーシップを法的に保証している国としていない国とを白地図上に示すという項目があったが、導入には唐突すぎるという印象を与え、また、多様なセクシュアリティを学ぶという本来の目的から離れ、隠れたカリキュラムとして欧米礼賛を学ぶ場になるという懸念が呈されたため削除した。

「セクシュアリティ」という用語、および「ホモフォビア」という用語については、特にこれを丁寧に説明して時間をとる必要はないと判断された。これは、日本語として定着していないカタカナ語を教えることの抵抗が教師から示されたというのが一因である。また、セクシュアリティについては、「多様な性」という用語で説明をすることができるため、敢えてカタカナ語を使用する必然性がないということ、ホモフォビアについては、これまで学習の機会がなかったがゆえにセクシュアルマイノリティに対する否定的な感情を抱いていた生徒たちに、過度な加害者意識を持たせる結果となることを懸念してのことだった。加害者意識をもってしまうと、セクシュアルマイノリティと「あまり関わらないようにしよう」と

表 2. 検討会での教師の助言後の、授業案の主な改変点

検討前	検討後	理由
政治家等、著名な性的マイノリティ当事者を紹介する。	市井の当事者を紹介する。	人権とはあらゆる人が有するものであるから。
同性結婚できる国の紹介をする。	同性結婚できる国の紹介はしない。	欧米礼賛をしているかのような隠れたカリキュラムになるから。
セクシュアリティの説明をする。	セクシュアリティの説明はしない。	概念として難しすぎる。カタカナ語に抵抗がある。これがなくても授業が成り立つ。
ホモフォビアの説明をする。	ホモフォビアの説明はしない。	生徒に加害意識を持たせすぎてしまうから。用語説明をしなくても授業は成り立つ。
授業案は1回分。	授業案は2回分。	1回で多様な性と、HIVを含めた性の健康とを扱うことは、時間的制約から無理である。
「キモい」「おかしい」などの声や笑い声が上がった時には、それを取り上げ、「今日は、なぜそのような反応が起こるのかについて考えます」と伝える。	左記に加え、「ホモ」、「レズ」、「おかま」、「おなべ」は差別用語だということを示す。	生徒たちがなぜ笑うかという「正面から受け止めていない」ため。直面化させる必要があるから。
ワークシート冒頭に注意書き無し。	冒頭に「正解はありません、すべてが正解です」と強調して書く。	ワークシートのどこにつけると「正しいのか」を教師も生徒も考えてしまうため。
教師がワークシートの手本を見せる。	教師がワークシートの手本を見せない。	生徒の自由な発想を妨げるため。
ワークシートのスケールが5段階評価。	ワークシートのスケールは段階とせず、強弱の棒線のみ提示。	連続性をより適切に表現するため。
ワークシートについて、教師が「全く同じところにつけた人はいないはず」と多様性を強調する。	さまざまなワークシートをあらかじめ用意しておき、それを生徒に提示する。	教師が強調しただけでは、生徒は具体的にイメージができないから。

心理的に隔離する可能性や、あるいは加害者としての意識を強め、一層忌避・攻撃する結果となる可能性もある。これらを回避するため、ホモフォビアという心理的に深い概念を紹介するのはやめ、言葉としての差別語を紹介するに留めた。これはまた、生徒たちから否定的な反応が返ってこようと来まいと、差別語の紹介だけはしておくという箇所にもつながる。

ワークシートに関しては、使用することそれ自体への疑義も呈されたが、それは、“他者から判断されるような違和感”から出たものである。したがって、ワークシートが他者によって判断されるものではなく、自己を理解するものであり、さらには、その自己理解した自己のあり方すべてが尊重されるということが本授業のもっとも重要な点であると考えられるため、むしろ、この点を強く打ち出しながら、積極的にこれを活用すべきだと考えられた。そのためワークシートの冒頭に、「どこに印をつけても、すべてが正解です」と目立つように呈示することは、非常に重要なことであると思われる。さらに、その多様性を可視化することに意義があるので、5段階スケールではなく、線のみを示し、どこにどう付けてもよい形式にすることは、本授業の目的と適っているといえよう。

自分とまったく同じワークシートをつけた人はいない、ということを実感させるために、教師が口頭で伝えるよりも、可視化できる形で多様なワークシートを呈示する必要性も指摘された。これについては、同じクラスの者同士で見せ合うこ

とは、特に当事者の生徒にとっては侵襲的であり、決してしないよう注意を払わねばならない。そこで、身近なクラスメートのワークシートでないことは、多様なセクシュアリティの実感を得るには、弱くなってしまうという短所はあるものの、安全性をとって、もともと授業案の中にさまざまなワークシートを用意しておき、それを教師が紹介していくという形式をとることにした。

このように、自分のセクシュアリティの理解を行い、次にふたりと同じ人のいない、さまざまなセクシュアリティの理解をするということで、1回目の授業は、これ以上の内容を盛り込むことはできないと判断された。そこで、2回目の授業で、こうした、ふたりと同じ人のいないセクシュアリティの違いを尊重できないと、自己否定、他者否定に陥り、孤独から自暴自棄、あるいは苦痛からの逃避行動が生じるという流れの中で、無防備な性行為など、リスク行動へと展開していくことを扱っていく。

<その他の助言に関して>

映像資料を用いたほうがよい、当事者の手記を照会したほうがよいといったアドバイスが多々あったが、これについては、下記のような理由から、今回は採用しないこととした。

これまで、個人的に多様なセクシュアリティに関心を持つ教員が各々工夫を凝らして、本テーマに関する授業を展開してきた。しかしこの状況は、「この教師のいる学校ではセクシュアリティ

の多様性について生徒は学ぶことができるが、いない場合は、一切触れられない」という、公教育上の不均衡性を招いてきた。実施していない学校においては、生徒が傷ついているという自覚のないまま、「気持ち悪いもの」、「いじられても仕方ないもの」として扱う学校風土が熟成されていることが懸念されるといえるだろう。

そこで、この授業案が目指すところは、多様なセクシュアリティに関する基本的内容を、すべての教員が悉皆的に教えられるようにするために、どんな教員でも「これがあれば授業を担当できる」と思える教材を作成することとする。したがって、授業案の内容も、同性愛の歴史、性同一性障害の定義・医療的対応、セクシュアルマイノリティ当事者のライフヒストリーといった、専門的知識やセクシュアルマイノリティの特殊な事情をしっかりと押さえた、多様なセクシュアリティについての高度な授業案といったものではなく、すべての生徒が知っておくべき多様なセクシュアリティについての基本的知識や態度を養う授業案を作成することを目的としたい。セクシュアルマイノリティがいるから多様なのではなく、「すべての人が多様なセクシュアリティの構成員であること」を基礎とするものを作成する。

もしも、本授業案実施後に、これが基盤となって各教員の教育意欲が高まれば、さらに高度な、当事者の個人的な事情を紹介した手記や、当事者団体を招いての講演、あるいは学術的な内容を掘り下げて提供できるよう、授業が展開できると望ましいと考えられる。そのための基礎の基礎を作成することを目的とする。

基礎であり、また悉皆的に、どの教員でも、どの教室でも、ということを見ると、映像資料の使用が必ず入った授業案を作成してしまうと、視聴覚教室やパソコンやスライドが使用できない場合、本授業が実施できないという危険性が生じる。そのため映像資料も用いず、できる限り、簡便な形で授業資料を提供するように配慮することも必要だと思われた。

<来年度・再来年度に向けて>

本年度報告書の最後に、分担者の講演後の感想に書かれた「多様性の尊重は、生徒たちにとって自明のことではないので、なぜ性において多様性が尊重されなければならないのかを明確にしなければ、生徒に残らないのでは...と感じた」という教師の指摘を挙げたい。

本研究で使用する授業案は、「他者を尊重でき

ており、なおかつ自己を尊重できているのであれば、HIV感染に繋がるような、無防備な性行動をとらない」という仮説に基づいて作成されている。すなわち、「なぜ多様性が尊重されなければならないのか」が生徒に理解されなかった場合、教育効果が得られないことは明白である。

学校という文化では、多様性の尊重が自明ではない、というこの教師の言葉は、一様性や同質性が好まれたり、優劣や序列が存在したりする学校文化においては、多様性という概念が、馴染みにくい価値観であることを示すものであろう。一方で、教師たちは、多様性の重要性もまた、強調したいと思われる。このような、さまざまな相矛盾するメッセージが送られている学校文化で学ぶ生徒たちが、「多様性を尊重することは、自分も他人も大切にされることだ、もしも尊重されないと、自分も他人も否定されることになる」と“実感を持って”思ってもらえるかどうか、それが、授業案の、そして実際の授業の、さらには、その後の健康行動の要となるといえる。来年度、再来年度の支柱はここにあることを確認したい。

E. 結語

本年度は、7回にわたる検討会を通して、「性の多様性の尊重」に基づく、自己尊重と他者尊重に到達するための授業案を作成することを目的とした。現段階では、来年度、授業実施できる形にほぼ近づいてはいるものの、微調整はまだ必要である。

来年度は、実際の授業の実施を行い、効果測定まで行うが、それと並行して授業案には、随時改良を加え、より多様性尊重に適う内容へと向上させていく必要があるだろう。この教育目標が達成されれば、HIV感染拡大の予防に寄与すると考えられる。

F. 発表論文等

(和文)

- 1) 佐々木掌子, 小児・青年期の性同一性障害への心理的アプローチ —思春期前の性同一性発達に焦点を当てて—, 児童青年精神医学とその近接領域, 13-16, 印刷中
- 2) 佐々木掌子, 性的マイノリティの子どもたちの現状と課題【連載最終回】, 高校保健ニュース第 499 号付録, 少年写真新聞社, 8-9, 2014.

(口頭発表)

国内

- 1) 須藤武司 (発表者)、佐々木掌子 (指定討論)、山口豊一 (司会) 性同一性障害児への間接支援をめぐる一教育行政機関による環境調整のための取り組みー 第33回日本心理臨床学会, 2014年8月26日, パシフィコ横浜
- 2) 佐々木掌子, 心理発達の視点から見た小児の gender dysphoria 委員会シンポジウム「性同一性障害の概念と精神医学の関わりを再検討するーDSM-5の発表を受けてー」 針間克己・松本洋輔・三橋順子 (以上他シンポジスト) 齋藤利和 (サブコーディネーター) 第110回日本精神神経学会学術総会, 2014年6月28日, パシフィコ横浜

G. 引用文献

- 1)Adelman, M., & Woods, K., Identification without intervention: Transforming the anti-LGBTQ school climate. *Journal of Poverty: Innovations on Social, Political & Economic Inequalities* 10(2), 5-26, 2006.
- 2)Birkett M, Espelage DL, Koenig B., LGB and questioning students in schools: The moderating effects of homophobic bullying and school climate on negative outcomes. *Journal of Youth and Adolescence*, 38, 989-1000, 2009.
- 3)Black, W., Fedewa, A. L., & Gonzalez, K. A., Effects of "safe school" programs and policies on the social climate for sexual minority youth: A review of the literature. *Journal of LGBT Youth*, 9(4), 37-41, 2012.
- 4)Blackburn, M.V. The experiencing, negotiation, breaking, and remaking of gender rules and regulations by queer youth, *Journal of Gay & Lesbian Issues in Education*, 4(2), 33-54, 2007.
- 5)D'Augelli, A. R., Pilkington, N. W., & Hershberger, S. L., Incidence and mental health impact of sexual orientation victimization of lesbian, gay, and bisexual youths in high school. *School Psychology Quarterly*, 17, 148-167, 2002.
- 6)Espelage, D. L., Aragon, S. R., & Birkett, M., Homophobic teasing, psychological outcomes, and sexual orientation among high school students: What influence do parents and schools have? *School Psychology Review*, 37, 202-216, 2008.
- 7)Hansen, A. L., School-based interventions for GLBT students: A review of three levels of research. *Psychology in the Schools*, 44(8), 839-848, 2007.
- 8)Hatzenbuehler, M. L, Birkett, M., Van Wagenen, A., & Meyer, I. H., Protective school climates and reduced risk for suicide ideation in sexual minority youths. *American Journal of Public Health*. 104(2), 279-286, 2014.
- 9)Horowitz, A., & Hansen, A. L., Out for Equity: School-Based Support for GLBT Youth. *Journal of LGBT Youth*, 55(2), 73-85, 2008.
- 10)Kosciw, J. G., Greytak, E. A., & Diaz, E. M., Who, what, where, when, and why: demographic and ecological factors contributing to hostile school climate for lesbian, gay, bisexual, and transgender youth. *Journal of Youth Adolescence*, 38(7), 976-988, 2009.
- 11)Kose B. W., The Principal's Role in Professional Development for Social Justice: An Empirically-Based Transformative Framework. *Urban Education*, 44(6), 628-663, 2009.
- 12)Macgillivray, I. K., Educational equity for gay, lesbian, bisexual, transgendered and queer/questioning students: the demands of democracy and social justice for America's schools. *Education and Urban Society*, 32(3), 303-323, 2000.
- 13)McGuire, J. K., Anderson, C. R., Toomey, R. B., & Russell, S. T., School climate for transgender youth: A mixed method investigation of student experiences and school responses. *Journal of Youth and Adolescence*, 39 (10), 1175-1188, 2010.
- 14)Plöderl M, Faistauer, G., & Fartacek, R., The Contribution of School to the Feeling of Acceptance and the Risk of Suicide Attempts Among Austrian Gay and Bisexual Males. *Journal of Homosexuality*. 57, 819-841, 2010.
- 15)Poteat, V. P. & Espelage, D. L., Predicting psychosocial consequences of homophobic victimization in middle school students. *The Journal of Early Adolescence*, 27 (2), 175-191, 2007.

- 16) Rivers, I., Recollections of bullying at school and their long-term implications for lesbians, gay men, and bisexuals. *Crisis*, 25 (4), 169–175, 2004.
- 17) Russell, S. T., Kosciw, J., Horn, S., & Saewyc, E., Safe Schools Policy for LGBTQ Students. Society for Research in Child Development Social Policy Report, 24 (4), 3-17, 2010.
- 18) Russell, S. T., Ryan, C., Toomey, R. B., Diaz, R. M., & Sanchez, J., Lesbian, gay, bisexual, and transgender adolescent school victimization: implications for young adult health and adjustment. *Journal of School Health*, 81(5), 223-230, 2011.
- 19) Sandfort TGM, Bos HMW, Collier KL, & Metselaar M., School environment and the mental health of sexual minority youths: A study among Dutch young adolescents. *American Journal of Public Health*, 100, 1696-1700, 2010.
- 20) Szalacha, L. A., Educating Teachers on LGBTQ Issues. A Review of Research and Program Evaluations. *Journal of Gay & Lesbian Issues in Education*, 1(4), 67-79, 2004.
- 21) Toomey, R. B., McGuire, J. K., & Russell, S.T., Heteronormativity, school climates, and perceived safety for gender nonconforming peers. *Journal of adolescence*, 35 (1), 187-196, 2012.
- 22) van Wormer, K., & McKinney, R., What schools can do to help gay/lesbian /bisexual youth: A harm reduction approach. *Adolescence*, 38, 409-420, 2003.
- 23) Williams, T., Connolly, J., Pepler, D., & Craig, W., Peer Victimization, Social Support and Psychosocial Adjustment of Sexual Minority Adolescents. *Journal of Youth and Adolescence*, 34, 471-482, 2005.